

## コンケン大学での居候生活 (13)

伊藤信孝

コンケン大学客員教授・工学部

コンケン大学に移籍してから、あと数日で半年になる。相変わらずコロナ禍で身動きができない。毎日宿舎と大学のオフィスを行き来するだけの単純な生活が続く。コロナ禍で学生も大学には殆ど来ておらず、最近になってようやくその数も増してきた。今日は2回目の90日レポートの提出に移民局 (Immigration Office) に出向く予定である。このことから自分がコンケン大学に移籍後半年を迎える事を実感させられる。しかし残念ながら、では「この半年で何をしたんだ」とよくよく振り返ってみると、自分としては「全く何もしていない」という感じである。自分のミッションは何かを探し求める気持ちからすると、「ふがない」の一言に過ぎる。具体的な学術活動、それも目に見える形での成果という殆ど無い。その中でもこれと想われるものを拾い上げると、次のようになろう。本報では「コンケン大学に移籍後半年」を振り返る。

- 1) コンケン大学の工学部が発行している学術誌のレビュアーを2人ほど探して欲しいと言う事で、日頃から世話になり、旧知の日本の大学の知人を紹介、ノミネートした。
- 2) 例年開催のタイ農業工学会の年次大会に発表の論文を1編用意し申し込み手続きをした。最終的な返事は「受理した」と言うことで5月の半ばに口頭発表の予定であるが、前もって安全のためのビデオの収録を済ませる必要がある。一人の閲読者からの閲読結果では「受理」ということであった。その後、参加登録費の届いた連絡では、参加登録費の支払いを確認した上でプログラムを知らせるのでビデオ・クリップの準備をしておくようにと言うことであった。登録費はすでに支払ってあるので、近々に連絡がくるものと心待ちしている。
- 3) 今年のタイ農業工学会年次大会は、5月の12-14日に、大学のキャンパスを使ってコンケン大学が企画主催する順番になっており、さらにもう一つ国際学会を併行して主催する予定になって居る。いずれも国際学会であるが、この学会での基調講演者を推薦して欲しいとの依頼を受け推薦した。幸にも一人はタイ農業工学会での基調講演、他の一人はもう一つの学会での基調講演に決まり、良かったと安堵している。
- 4) もう一つの栄誉は、タイの科学技術ジャーナルの編集員に任命された事である。何処でどの様な評価が成されたのかどうかは、筆者の知る所ではないが、栄誉なことと素直に喜んでいる。英文名を以下に示す。

Editorial Board member of “International Journal of Science and Innovative Technology (IJSIT)”, The Association of Researchers of Thailand organizing academic journal (February 2021=)

- 5) さらに想わぬ幸運とでも言うべきか、ひょんな事から別の国際学会での基調講演者と

して招待されることにもなった事である。この学会については殆ど知らなかったが、突然の様な背景で自分宛にメールが届いたのかも定かではないが。内容を要約すると次のようである。5月末から6月初めに掛けてスペインで開催予定の国際学会だが参加者応募をして居るが、企画委員会のメンバーの数を増やしてでも広く宣伝し、多くの参加者の参加を期待したい。できればそのメンバーとしての役割を引き受けてくれる人が居れば有り難いので積極的にお願したい、と言う趣旨のメールであり、学会の開催内容、すなわち日程、開催形式、学会での公用語、発表論文のカバーする学術的領域、論文の最大ページ数、参加登録費などが書かれたアナウンスメントが添付されていた。内容的には **SIGNAL 2021** と言う開催イベントの名称からして、その内容が情報、検出、処理、計測、通信の分野である事が分かる。世界的なコロナ禍の元での開催となるため、現時点ではオンラインと現地参加のハイブリッド (**Hybrid**) での開催となっている。筆者としては専門分野からして異なるため、責任を持って委員としての任を引き受けるのは難しいが、頂いたアナウンスメントを多くの関係者に拡散することなら協力できるが、それ以外は難しいと言うことで、次の2つの理由で、企画委員としてはあまり参加者を集められないことを連絡した。その理由とは1) 筆者の専門分野と今回の学会の分野、内容がいささか異なること、2) 参加登録費が高価で、オンラインでの参加となった場合でも、参加としては極めて高い、と言うことを連絡した。しかし事態がどの様に変化するかわからないので何とも言えないが、いくらかの配慮、あるいは考え直しもあり得る、と言う事であった。とにかくアナウンスを拡散してくれと言うのだから、それくらいならと腹を決めてその世話役として協力すると言うことにした。知人や機関を通じて情報拡散を依頼したが、参加登録の期限である3月初めになっても一向に参加申し込みはなく、「やはり想定通りであったか」と悟り、その旨相手側に連絡した。素直に事実の背景を説明し、自分の努力不足で申し訳ない旨、謝罪も添えた。実際、想定内であったとは言え物事がうまく運ばなかったと言う思いは心を暗くし、責任感すら重く感じたので「予想通り、参加登録申し込み者は無く、誠に申し訳ない、当方の努力と実力不足で深く陳謝する。」と添えた。しかし本来自分の分野が応用分野であり、今回の学会の内容に沿った物では無いことは分かっていたが、相手側も「応用分野」も必要であるし、特に農業においては関心も高い」と言う事であった。しかし筆者自身がその適任者かと言うことになると自信も無ければ、名乗りを上げるほどの勇気も無かったので、取るべき行動も控えめであった。何もできなかったと言う事への無力感と、関わっておきながらその責任を果たせなかったという責任感も加わって、陳謝と同時に今回のイベントと筆者のやっていることにはこれほどの差があるということを理解して貰うために、2019年末にバンコックで開催のドイツ政府後援の **DLG International** シンポジウム (**Agrifuture**) での講演論文とビデオを添えて陳謝の意を表して送付した。しかし、その翌日、驚いたことに返信が届き、送付頂いた論文とビデオを見た。よくよく調べたが貴方が上記のシンポジウムで講演発表した事を見つけた。われわれもその会議は良く知っているが、この際キー・ノートかチュートリアル・セッションで応援してくれないか、われわれの

方からSOSを出したいくらいの気持ちだ、と言う内容であった。しばらく考えたが、相手側が了承し、なおかつ依頼されるのであれば「これも一つの機会」と捉えてやってみるかと言う気運に成ってきた。早速学部長に連絡を取り参加許可を取るべく動いた。しかし精神的支援（励まし）や協力は依頼しても、居候の身でそれ以上の依頼はしないというのが基本的姿勢であった。参加登録費は、基調講演者であろうと無かろうと同額で、その差があるとすれば、参加者の身分、所属のみで、基調講演者と言えども500ユーロ余と言うから米ドルにして約730ドルほどである。確かにわずか30分そこそこの基調講演発表に招待されて、これほどの額は・・・との躊躇もあるが、物事は考えようである。筆者は次のように考えた。自分が参加して講演発表することでどれほどの効果、メリットがあるかと。定年退職し、2度目の就職にありついた今の状況を考えると次のような結論になった。

1) 確かに専門分野的に自分が最適な人物ではない。かといって自分が何もしなくても、自分をスキップして別の人がある任を果たすだけである。今更業績や名誉を欲しいとは思わないが、自分自身はともかく、その他の人にとってはどうか、と言う点である。経緯はともかく折角の機会を頂いて登壇することには別の利点がある。私利私欲でも無ければ名誉欲でもない。上げれば切りが無い多くの事項がある。例えばコンケン大学の名前を世に知らしめることができる。この事はとりもなおさず大学のランキング・アップにも多かれ少なかれ影響を与える。同時に農業工学分野の領域を広げることができる。このことは排出する卒業生の就職領域、就職の機会を創造し広げることにつながる。また農業の重要性、今の時代に如何に農業が果たす役割が大きいのか、特にアジアにおいてはもっと重要である、と言う事を強調できる絶好の機会にも成る。となればもっと積極的に、前向きに、勉強し、準備して対応する事が自分に与えられた貴重な機会でもあり、果たすべき任務、役割でもある、と考えて居る。どの様な形であっても「成功、目標成就」に近い結果を出すことが使命でもあると考える。自身をよく知る自分としては、むしろ有り難い機会と捉える素直さが必要であり、これもミッションの一つと考えている。「年寄りは何を今更」と言う意見もあるが、これぞ定年退職した身の強みで、恥ずかしいと思わない勇気、ミッション・ポッシブルとする決断力は現役とは少々異なる。無理に、また強制的に、業績を上げるためにやらざるを得ない現役の環境と異なり自由に決断できる自由度が全く違う。定年退職とは何とすばらしい事か、と言う思いに浸り、またそれを実感することもしばしある。

今回のことから多くを学んだ。自分だけのことを考えると安易な方向に走る。しかしよくよく考えると、自分よりも他人、後に続く人のことを考えると、それがむしろ自分が果たすべきミッションに見えてくる。果たしてどの様な結末を迎えるかは時期を経ないと判断ができないが、決めた以上はやるしかない。しかも自分自身のためでなく人のため社会のため、後に続く若者達の為と言うところまで思いは広がる。これが生きていくことの意味でもある。

さらに今回のことで学んだ重要な事は、とにかく継続為て機会を捉え、学術的イベント

(シンポジウム、ワークショップ、国際会議)に参加し講演、論文発表をしておくことである。情報化時代を身近に感じるいくつかは、定期的に配信されてくる Lnked-in や ResearchGate で最近の自分の学術活動がどれくらいかを計り知ることができる。自分の論文が、世界でどの程度読まれているか、またどの地域の人が多く関心を持って読んでいるか、をすぐさま知ることができることである。書いたものがなくては話にならない。また自らの意見や主張を述べるにも、エビデンスとしての実績を見せるにも、論文は必要かつ重要であることを再認識した。他人が何を言おうと、如何なる批判や中傷をしようとも、書いたものがあるから反応があるわけで、それがなければ話題にもならないし、注目も浴びない。注目を浴びるのが目的ではないが、折角の主張、提案が埋もれてしまう。主張や提案が採択されるかどうかは、多数決と予算を用意する機関の権限に依るところが大である。その意味でも論文等は主張や提案の根拠を示す証拠ともなる。また知的所有権やパテントなどの権利取得、あるいは保護にも寄与する。文書で書くことが世の中を動かすきっかけにもなる。学会は所定の手続きをすれば、誰もが会員資格を得ることが出来る。また参加発表、論文投稿の機会を得ることが出来る。これから書くのでは無く、既に書いたものがあると言う事が重要であることは論を待たない。

官公庁のいくらかでは定年退職後の天下りという形でシステム化(?)して居る話題が巷の俗世間では良く聞かれる。また企業の顧問や相談役、アドバイザーなどの役職もあるようであるが、一般には顧問というのが良く聞く話である。技術進展の早い時期だけに、余程の能力が無いと、このような形での受け入れは難しいと言われる。もちろん、学術的研究能力に限らず、その人が持つ人脈などを使って他国、他機関への対応を計るというのも良く行われる手であるから、必ずしも学術的研究能力には限らない。例えばある企業が海外のある国に自社開発の製品を持ち込み、販売したいと言う場合、相手国の試験機関に偉い先生が居て、なかなか試験、認可が通らない、よくよく調べたら日本の大学の先生とその偉い先生とは米国ではクラス・メートであったとか言う事があると、その先生を使って交渉し問題の解決を図ると言う政治的やり方である。現代では大学より企業の研究の方が進んでいる場合が多く、定年退職後に企業の顧問やアドバイザーとしての受け入れをしてくれるような企業は殆ど無いと思われるが、あるとすれば何某かの思惑があつての採用受け入れと言う事であろう。65才で定年退職してもまだまだ働けるのが現代でもある。早々と隠居生活に入るには少々早すぎる感もある。と言ってもそれほどすんなりと次の職が見つかる例は少ない。こうした背景を考えると筆者の場合は有り難いほどうまく事が運んだと感謝している。自分が信条とする道を外れて不本意に再就職先を考える必要が無く、信条を曲げずにこれまでやってこられた事は、極めて希でもあり、また受け入れて頂いた相手機関に感謝の念が絶えない。これらの状況を踏まえると、自分が真っ先に海外の大学に出て良き例を作ることは、後に続く世代への新しい道を開くことにも通じる。天下りをしなくても、あるいは就職がないなどと言っておらずに、継続して海外の大学に出る機会があれば、新しい働き場所としての雇用機会を創造できる事につながる。定年後の再就職

先、国際交流の推進、天下り先ポストに依存すること無く国際化教育・研究の推進、アジア、世界への貢献など、多様な効果もかなり期待できる。ただタイのみならず、途上国の大学でのこうした対応には問題が無いわけではない。それらのいくつかを紹介すると以下の様になる。

- 1) 一般に契約期間が1年間であり、延長は毎年新規に申請し、受入れ手続きが成される。
- 2) 相手大学の学部長、学長などの任期満了に伴い、辞職または移動、転職しなければならない。もちろん新規学部長の許可があれば延長は問題ではないが。
- 3) 授業、講義などは相手機関（大学）の教員とのシェア（分担）で行われる。
- 4) 研究費などは基本的にゼロで、学部長あるいは相手機関の教員の持つプロジェクトに加われば、現地に出たの調査、データ収集、シンポ、学会などへの出席も可能であるが、そうでないと予算は基本的に無しと考えるのが一般的である。
- 5) 国などの政府機関からの派遣では年齢制限があるので、ある上限までしか応募ができないが、相手機関のダイレクト・ハイヤーでは年齢制限はない。あくまでも相手機関の判断が優先する。
- 6) 相手機関が雇用を考えるのは、雇用により相手機関に利点が無ければ意味がないから、期待も大きい。しかし年齢と共に日本側からの予算取得は極めて難しくなる。基本的に日本の大学から日本の政府への予算申請という形を取るから、申請者自身の年齢や身分が条件となる。特に定年退職者については日本の政府、公的機関の対応は極めて冷たいと言うのが一般的理解である。だから限られた省庁が天下り機関の探索や創造に躍起になると言われる。省庁間で差はあるが、対象は省庁の人間が優先であり、大学の教員は対象にはなっていない。となると大学人の誰かが相手機関との間に顕著な業績または功績を遺して、相互信頼を築き、それを維持する形となる。この雇用システムの長期間の継続は例えMOUを締結したとしても、派遣・受け入れられる人材に差があり、余程の相互信頼が無ければ継続する事は難しい。
- 7) また収入（給料、手当）においても若い世代にとってはあまり魅力は無い。わが国と相手国の間の経済格差に起因するが、雇用契約条件の中身でも、外国人が有利に扱われる部分は殆ど無い。問題が起きても、その解決策の対応は原因がどちらの側にあるかに限らず、任命権者が自分が任命した部下を公平公正に処罰し更迭するなどと言うことは極めて希であり、多くの場合は喧嘩両成敗となる。最終的には現地人と外国人とでは雇用期間も異なり、外国人は基本的に1年であるから、上司である「長」は何もしなくても、時期が来れば外国人の方が回顧もしくは自主的退職という結果になることは明白である。仮にさらに延長ができたとしても、人間関係で不愉快な勤務、生活を毎日しなければ成らないとなると、やはり辞職を選ぶということになる。極端に言えば、良いか悪いかはともかく、相手機関にとって得にならない、あるいは利益にならない人間を敢えて延長までして置いておこうとは思わないのが基本的考えである。したがって、このような定年退職後の雇用は、名実ともに「年寄り」を対象にしたものという理解が正

しい。一部を除いて相手機関の在職者は現役であり、年齢や世代間の考え方の相違が種々の問題や人間関係に摩擦を引き起こす。管理者の多くは、自分より出しゃばったことをして貰いたくない、俺の顔は丸つぶれだ外国人である彼または彼女が学部長や学部長補佐を差し置いて、行動すると、その行動が学部の意向受け止められるのは気に入らないと言う思いが浮上してくる。そうなると対応は急変し、誰もが距離を置くようになる。教員だけではない。職員もその様に急変する。なぜなら上司から通達が出て「あまり近寄るな」と言う事になるからである。物事を頼んでも返事が来なくなるし、来ても極めて遅くなる。窓際族扱いに似た対応となる。いわゆる「早く出て行ってくれと言う雰囲気にして、自らが身を引く対応を暗示した精製や雰囲気は漂う。定年退職者はそれでもまだ我慢ができるが、若い世代にとっては「そそくさと出て行きたい」という気になる。また長く居ても将来が不安となるからである。幸い現地に残ればまだしも、日本に寄稿して再就職となれば公私ともに複雑な問題が浮上してくる。大出としても「良き思い出」としての記憶には成らないから、これまでの両機関の良好な関係がそれで終わりを迎えることにもなる。

年齢に関係なく良きアイデアに溢れたオリジナルな提案をしても定年退職への予算申請に陽が当たることは、日本の社会では極めて少ない。殆ど皆無と言っても過言では無い。ここから抜け出す方策の一つが上級国民となる事であろうと考える者が居ても不思議ではない。しかしそれには著名な大学を出て、所属学会や関係機関でその能力や実績が「十分に評価、認知」為れている必要がある。となると定年後にその壁に挑戦することは極めて難しい。年齢は若返らないのでやり直せないからである。となると既に「定年退職した者」が後に続く定年退職者にその雇用機会を開拓、用意するというのも重要な役割の一つであろう。本来は学会、大学などの機関の「長」が「高い志を持って道を切り開く使命がある」のではないかと想う。会長や理事ともてはやされ如何にも学会に対する貢献度が高く評価されていても、定年退職後もその実績やキャリアを有効に利用して天下り機関や企業の顧問になる事を自慢する程の勇氣も無いし、能力も持ち合わせていないことを誇りにしたい。自らの専門分野でも無いのに、それらしき顔をしてキー・ノート話題提供者にしゃしゃり出る事はしたくないが、依頼され機会を頂けるのなら、新しい分野であろうと「挑戦的に、勉強し、開拓して専門家に成れば良い」と考えて居る。掲げた目標達成には人それぞれに考え方がある。必ずしもその考えが同じではない。例えば筆者が立ち上げた「3大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウム」の副題は世界に於ける「アジアの役割」であるが、「どのように、如何にその役割を果たすか」は人それぞれに異なる。筆者は筆者の考えであり、他の人はまた異なる考えを持っている。しかしそれを遂行するには、いくつかの基本的合意に沿った相互理解が必要である。中にはその標語を使って中身は金を取るのが主目的というプロジェクトもある。殆どのプロジェクトはそうした部分が見え隠れする。あるいは名誉欲であったりもする。いくつかの社会的役職につき、誇らしげに存在を誇示するというケースもある。このような現状をあまりにも多く見るとき、自らが段々と孤独に成って

いくのを覚える。仲間への不信、最終意思決定への偏った多数決による異なる意見を持つ仲間の排除、などにつながる。なんとかそうした事から離れた形での関係構築に今回の取り組みが成ってくれること、否、そうした取り組みに是非持って行きたいと考えている。